
『終らない宿題』

愛弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『終らない宿題』

【Nコード】

N3226J

【作者名】

愛弥

【あらすじ】

冬休み最終日、終らない宿題を片す、高校一年生の成、靖、元稀、工の四人ほのぼのギャグ話。

（前書き）

この話しは、高校一年生の四人の日常を書いたような、雑な話です（＾―＾；）

気が強くて、リーダー的な成と、のほほんとしている靖と、元気っ子な元稀と、大人しい性格の工の話です。

今回の話しは、靖と元稀の冬休みの宿題を、成と工が手伝う話です。

出来れば、この四人の話を色々書いていきたいです

（＾＾）

何故
宿題を
終わらせないんだ。
お前らは。

『終つてない宿題』

「……てめえらよお、何しに家に来たんだ？」
「ん？宿題片しに。なあ？靖」
「うん。そうだよ。何言ってるの成？」

元稀と靖の返答に、成の怒りが増す。

今日は、……冬休み最終日。

長かった2週間の冬休みも、終わりを迎える時がきた。

で、今ボクらが成の家に集まって何をしているかというと。

長期休み恒例になった宿題を写す会。

会って言っても宿題をやっていないのは毎回、元稀と靖なんだけど。

成とボクは毎回やってるから、見せる側。

……あ、因みにボクの名前は工。

今更自己紹介かよっていう感じかもしれないけどね。

「…ほう。お前らはそれでも宿題をやりに来たと言っのか」

「だからそうだってば。なあ?」「そうだよ。さっきから成しつこいよ。ねえ?工」

「えっ…ボクに振る?!」

変な所でボクに振らないで欲しい…。

そんなことは置いといて。

また成の怒り度が増してきちゃってるよ…。

だって成、口元は笑ってるけど明らかに目は怒ってるもん。

……まあ、怒る気持ちは分かるけどね。

だって、靖と元稀。

今、何してると思う？

「いつて！何すんだよ成？！」

「黙れ。てめえらが悪いんだよ。俺をこんなに怒らせるから」

「あれ？成怒ってたの？」

「靖、てめえは人の表情さえ読めなくなったのか？」

「いたっ！」

あーあ。

成ついに元稀と靖の頭ノートで叩いちゃったよ。

でもまあ、自業自得かもしれないね。

だって元稀と靖が今してるのは…

「てめえらな、コントローラーじゃなくて鉛筆持て！！ゲームしながら何が宿題やってるだ。だ？！喧嘩売ってんのか？！」

そう、元稀と靖がやってるのはテレビゲーム。

成が怒るのも無理はないでしょ？

成の家来た途端、元稀が『あつゲームあんじゃん！』って言い出して。

それに靖が『やろう！！やろう！！』ってのっかつちゃって。

成とボクとで止めようとしたんだけど、失敗して、今の現状に。

最初の内は、一時間だけっていう約束で許してたんだけど。

一時間経っても辞める気配はなくて。

ボクが一時間経ったよって言っても、あと少し、あと少しって言うて、もう三時間は経ってる。

痺れを切らした成が怒っても、聞く耳を持たない二人。

痛い目を見るのは間違いなく自分達なのに。

「取り敢えず、ゲームやめろ」

「あー…あとちょっと」

「それより成と工も一緒にやろうよ」

「……………」

『楽しいよ』と笑顔で誘ってくる靖。

別にボクと成はやってたって大丈夫なんだけど。

さっきも言ったけど、本当に痛い目見るのはそっちだからね。

「元稀、靖。ゲームより宿題の方が大事なんだよ？だから早くやらないと」

「大丈夫だよ。写すだけだから」

「そうだよ。心配はいらねえよ。写しやあいんだから」

「写せばいいっていう問題じゃないんだよ？分かってる？」

「大丈夫、大丈夫。どうせ俺らやってたって理解できねえから」

……やらなきや、理解出来るも出来ないもないじゃん。

ボクらが話をし終わったその時。

『ブチッ』

という音が聞こえた。

その音の正体は…

「ちょっおい成！何してんだよ?!」

「……さ、宿題をやれ」

「テメツ、電源切るんだつたらせめてボタン押して消せよ!!」

「そうだよ。なんでまたコンセントなんて抜いたの？下手したら感電して死んじゃうんだよ？」

「んなことどうでもいいから、さっさと終わらせろ」

「…いや、本当に危ないよ。成」

音の正体は、成がゲームのコンセントを引っこ抜いた音。

普通はあんま音ならないけど、今回は成が怒りに任せて引っこ抜いたから、『ブチッ』なんていう音が鳴った。

本当に危ないよ、成。

「……ま、明日だしやるか。成怒ってるし」

「だね。やろうつか。ていうことで成、宿題みーせて」

「……ハ？てめえらでちゃんとやれよ」

「「……え？」」

あれだけ騒がしかった部屋が、一気に静まり返った。

「……ちょ、待てよ成。自分らでやれってどういうことだよ」

「夏休みの時は見せてくれたのに。優しかった成は何処にいったの？」

「……取り敢えず。てめえら、夏休みん時宿題写した結果がどうな
ってんのか分かってんのか？」

夏休みの時は、ボクと成は渋々二人に宿題を見せていた。

だけど、二学期の二人の成績を見た成は、このままじゃ二人共進級
するには危ういんじゃないかっていうことで、今回は見せずに二人に
やらせようっていうことにした。

分からない所は、ボクらで教えればどうにかなるんじゃないかって
思ってたんだけど。

当の二人がこの状態だから。

終わるものも終わらない状況になっている。

「俺はな、てめえらのことを考えて言っただけだ。ホラ、分か
んねえとこあったら言ってみろ。教えてやるから」

「……………」

「あ、じゃあ俺工の写す！」

「俺も！！」

「え、ボクも見せないよ。」

そう言うと、拗ねる二人。

ボクらは二人のことを思っ言ってるのに。

「ホラ、さつさとやれよ。時間ねえんだから」

「だけどよお、俺らが今から努力したってどうせ間に合わねえぜ？」

「……まあ、その確率が高いだろうな」

「そうしたら俺ら提出点もなくなるんだぜ？」

「あゝ……」

しまった。

そのことを考えていなかった。

多分、成もボクと同時にそのことを思っていただろう。

「だったとしても、それはお前らが悪い。」

「……そうだけど、俺と元稀が進級出来なくても成は別に構わないの？」

「……そつ、それはお前らの問題だろ。俺には関係ない」

「親友を見捨てる気なの？」

「しつ、知るか。」

あ、成が段々折れてきた。

成はああいう、キツイ性格だけど、根は優しい性格だから。

あんなことを言われたら、段々手助けしてあげたくなるみたいだ。

ホラ、もう。

優しい部分の成が出てきた。

「…しゃあねえな」

「え？」

「……今回だけ、だぞ」

そう言って、宿題を靖と元稀に渡す成。

その行動に、思わず笑みが零れた。

「いいの？成？」

「…今回、だけだ。今回だけ。今後は一切見せねえからな」

「ありがとう、成」

「そのかわり、進級出来なくても知らねえからな！！」

「おうよ！！安心しろ！俺らは大丈夫だ！！なあ？靖」

「うん！！」

「……馬鹿共が」

悪態を吐きながら、ほんのりと顔を染める成。

結局こうなるんじゃない。

見せないでおこうって話し合ったのに。

「結局夏休みの時と一緒にだね」

「……つとに馬鹿だよ、あいつら。」

「写したって成績は変わらないのにね」

「分かっててやってんだよ。あいつら馬鹿だから」

きつと、次の大型連休の最終日も、今日みたいに、もしかしたらそれ以上に騒がしくなるんだろうな。

（後書き）

読んでいただいて、ありがとうございました（＾Ｏ＾）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3226j/>

『終らない宿題』

2010年10月28日07時56分発行